

仲間

第12期 中野 真衣

「ゼミの皆が好きだから、本当はゼミを辞めたくないです…。でも、どうしても卒論を書きたくないの
ゼミを辞めます…。」2015年6月、12期の前で泣きながらこう告白した私が、今、同期の中で最も早く完
成した卒論の横で卒業エッセイを書いているなんて、本当に信じられない。冒頭の言葉を同期に伝えた当
時、私は、小野ゼミに入る際に掲げた「学問において、何か1つのことに全力を尽くし、誇れるものをつ
くりたい」という目標を、関マケをやり遂げたことで達成した気になっていたため、卒論を執筆する理由
を見失っていたのであった。しかし小野ゼミの皆は、小野ゼミを去ろうとする私を文字通り、必死に引き
止めてくれた。特に、12期ゼミ長の梶田君、大学院生の菊盛さん、そして小野先生から、有り難いお言葉
を頂いた。この場をお借りして、それらのエピソードを紹介し、感謝の意を表したいと思う。

梶田君は、日吉駅の改札前で、「俺は中野さんのことを、12期の大事な仲間だと思っている。だから一緒
に卒論を書いて、最後まで仲間だと思わせてほしい。」と粘り強く私を説得してくれた。この言葉を聞いた
当初、正直に言うと、「仲間」という陳腐な表現に辟易とした（梶田君ごめんね（笑））。しかし、なんとなく
梶田君の言葉が心にひっかかったまま、数日後、授業を受けに三田キャンパスに向かうと、猛烈に12期
に会いたい、と感じている自分がいた。その時、仲間というのは、こんな風に理由もなく会いたいと思え
る人たちのことで、自分にとっての仲間は、確実に小野ゼミ12期である、と気が付いたのであった。

また、菊盛さんは、つるのやのトイレの前で、「真衣ちゃんのためなら卒論の1本でも2本でも手伝うか
ら、ゼミを辞めないでよ！一緒に頑張ろうよ！」と抱きしめながら一喝して下さった。この言葉を聞いて、
去年、先輩方が、どれだけ多くの犠牲を払って関マケをご助力して下さいたのかを思い出した。達成した
と思っていた先述した小野ゼミでの目標は、実際は多くのご助力の上に成り立っている虚像のようなもの
で、このままではお世話になった先輩方に合わせる顔がない、と我に返った。

そして、小野先生は、私が無礼にも卒論を書きたくないという旨を打ち明けたとき、笑顔で、「それで君
が後悔しないなら、いいんじゃない？」と仰って下さいました。予想外の優しいお言葉に、私は涙が止ま
りませんでした。私はこの言葉のおかげで、強制的に卒論を書くのではなく、卒論を書く意味を探し直し
て、自分の意志で卒論を書き進めることができました。本当にありがとうございました。

12期は何をやっても上手くいかない代で、先輩には怒られてばかりいて、後輩の13期の方がよっぽど
優秀だった。しかし、いざというときに一丸となって困難に立ち向かうことのできる団結力の強さは、ど
の代にも負けないであろう。そんな素晴らしい仲間に出会えて、共に小野ゼミを卒業できたということこ
そが、今となっては私の誇りである。みんな、今まで本当にありがとう。楽しかったよ。また会おうね！